
お伽噺と言わないで。

SatukiAon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お伽噺と言わないで。

【Nコード】

N3047Q

【作者名】

S a t u k i A o n

【あらすじ】

柴原桃河は、ごく普通の高校生だった。だが彼の平凡な日常は、帰宅途中に出会った謎の少女と、彼女を追って現れた異形の男たちによって崩壊する。血のような赤い眼、額に突き出た二本の角。男たちは、まるでお伽噺に登場する鬼のような姿をしていた――。

【1】

冗談、だろ……？

彼は誰にとでもなく呟いた。

窪んだ部分の塗装が剥がれ、真新しい黒い傷が付いたオレンジ色の鉄柱。

渾身のフルスイングで見ると無残にひしゃげた金属バット。

くの字に折れ曲がった凶器を手にした実行犯の、常軌を逸した赤い眼と。

額に突き出た一对の黒いツノ――。

何ひとつ、日常的なものが見当たらなかった。

夢なんだろうか、コレは。

アスファルトに這いつくばったまま、彼は思った。

だが、擦り剥いた膝や手のひらは、いまでも脈打つように痛む。

ああ。

――これは、夢ではないのだ。

【1】（後書き）

オリジナル小説処女作です。
至らぬ点多々ありますが、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

【2】

朝の教室。短いホームルームが始まる前の緩やかな時間帯。

日ごと冷たさを増していく清々しい空気は、すでに若い活気に暖められている。教室を出入りする足音。気の合う友人同士で交わす雑多な会話。教壇を囲んだ小さな人だから、ときおり楽しそうな笑い声が弾ける。それは、隣向こうの教室でもさほど変わらない、ありふれた日常の風景だった。

そして、陽あたりのいい窓際の最後尾の席に。

「あふっ」

気の抜けきった欠伸が、ひとつ。

机に片肘を突き、気だるげに頭を預けた少年が窓の外を眺めていた。特に興味深いものがそこにあるわけでもない。眠そうに瞬かせた目の端に涙を浮かべて、ぼうつとしているだけ。それが彼のお決まりのスタイルであり、特徴だった。

良く言えば無造作ヘアー、悪く言えば寝起きとも思えるボサボサの黒髪。袖を通していただけの制服の上着。胸元まで開けた白いシャツと、赤いアンダーシャツ。これらのモノが覇気のない表情と相まって、どこことなく、だらけた雰囲気醸し出している。

しばはらとうが
柴原桃河。17歳。朝は苦手なのである。

桃河がまた、ふあっと欠伸をすると、

「おっはよー！」

ざわついていた教室の中に、ひときわ明るい声が響き渡った。自然とクラスの大半の視線が集まる。室内に入ってきたのは、朗らかな笑みを湛える小柄な少年だった。それを認めてクラスメイトたちから次々に声上がる。

「走太くんおはよー」

「おーっす、走太あ」

「うん。おっはよう」

走太——と親しげに声をかけられる少年は、机の間を縫うように移動しながら、笑顔でそれに応えていく。そうして自分の席まで辿り着くと、体を折るようにして後ろの席に座る生徒の顔を覗き込んだ。

「おはよ、桃河！」

「……」

視界いっぱい満面の笑みを割り込ませてきた走太の顔を、桃河は半眼になって睨んだ。

そんな視線を微塵も気にせず、走太は何かを期待したような眼差しで桃河を見つめる。その曇りのない大きな瞳は、年のわりに幼い顔と評される最たる要因だった。

桃河は今日こそ何か言ってやろうと思考を巡らせたが、残念なことに朝は三割り増しで頭の回転が悪い。結局、効果のありそうな言葉は何も思いつかなかった。

疲れたように息をついて、

「……おう」

「あははっ。今日はいちだんと不機嫌だねえ」

「うるせえ。今日も朝からムダに元気だな、おまえは」

「朝は元気なのが普通だと思うよ？」

ちょこんと小首を傾げて笑うと、走太はようやく席に落ち着いた。「そういえば、今朝はずいぶんと遅いな。もうとっくに鐘は鳴っただろ？」

そもそも桃河よりもあとに走太が登校してくるなど、いままで一度もなかったことだ。

「え？ ああー……：そうだね。うん。ちょっと、ね」

「ふーん……」

わかりやすく言葉を濁した走太を訝しみながらも、桃河はそれ以上追求しなかった。走太はもともと隠し事のできない性格だ。無理に聞かなくても、そのうち自分から打ち明けてくるだろう。というより、こんな態度を取るときの走太は、何か口クでもないことを抱

えている確率が高い。天性の人好きとお人好しがそうさせるのか、彼は面倒ごとを拾ってくる天才。本人に自覚はないが立派なトラブルメーカーなのである。

触らぬ神にんとやら。また厄介ごとに巻き込まれるのはごめんだと、桃河は気のないふりをして、窓の外に視線を戻した。

【3】

「そうそう、桃河知ってる？」

「んー？」

鞆の中身を丁寧に机の中へと移しながら、走太は後方に向かって声だけを投げかけた。

「駅前の連続通り魔事件、犯人が捕まったんだって。今度は高校生だったらしいよ」

「へえ。まさかウチの生徒じゃないよな」

「それは違うけど、ひょっとしたらどこかで擦れ違ってるかもしれないよね。僕たちだって駅前モールとかよく行くし。そう考えるとちよつと怖いなあ。クラスで隣の席の子とか、どんな気持ちなんだろう」

「まあ、普通に驚くだろうな。そういう奴って真面目で大人しい生徒ってのがセオリーだし？」

「……なんでそんなことしなくちゃいけなかったのかな、その子。同じ高校生なのに僕たちと何が違うんだろ」

「さあな。どうせまた、むしゃくしゃしてやっちゃったとかそんな理由だろ。そんな奴の気持ちなんてわかんねーよ」

「最近、そういうの多いよね。昨日もテレビで見たよ。子供が家族を刺して家に火をつけたとか、男がいきなり刃物を振り回して暴れ出したとか。やっぱり人間関係なんかでイライラしてたんだって」
「ったく。こうも似た話ばっかだと、正直またかって感じになるよなあ」

事実、そんな事件は飽きるほど見聞きしていた。人が人を安易に傷つけ、命を奪う。いつのころからか、テレビをつければ毎日そんなニュースばかりが流れていた。

突発的な衝動による暴行、弱者への非道な虐待、鬱積した感情を晴らすためだけに軽んじられる命。日々繰り返される凶行は、いま

や未成年による殺傷事件すら珍しくないのが現状だ。急増する殺伐とした事件は、もはや日常的なものになりつつあった。まるで自分が人であることを忘れてしまったかのように、大人も子供も瑣末なことで見境を失くし、他人に刃を向ける。己の欲望の赴くまま人の命を奪う血も涙もない行為は、さながら鬼の所業と言えた。不安と不信が渦巻き混迷する現代社会。見えない闇に取り憑かれ隣人や同級生、さらには肉親すらもいつ豹変するかわからない。人の世は、乱れているのだ。

「クラスメートがある日、突然、鬼と化す——かあ。世知辛いつていうか、ホント怖い世の中だよな」

桃河が冗談めかして言うのと、ふいに頬杖を突いていた腕が強い力で引っ張られた。支えを失った頭部は重力に逆らうことなく、かくんと落ちる。

腕を引いたのは前の席に座っている少年だ。走太は体ごと振り向いて、桃河の右手を両手でしっかりと握っている。

桃河は机に突っ伏すような体勢で、低く唸った。

「おーまーえーはあー……っ」

「桃河」

頭上から降る声に常でない切迫さを感じ取った桃河は、出かかっていた苦情を呑み込み顔を上げた。

幼子のような柔らかな髪が、窓から差し込む光に透けて薄茶色に輝いて見える。眉を寄せ、くりくりとよく動く瞳に、心持ち影を落とした走太の表情は真剣だ。

ぎゅっと桃河の手を掴む力が強まる。

「もしも、人の心の隙間に入り込んで悪さをする奴らがいたら、桃河はどうする？」

「どうって……おまえなあ」

「戦う？」

いつもと正反対の硬い声音でなんの脈絡もないことを言い出した少年を、桃河は無言で見つめた。珍しく真面目な顔で何を言い出す

のかと思えば、今日はまたずいぶん抽象的な物言いだ。まったくもって意味がわからない。走太の性質を知らなければ、困惑は必死だろう。とかく想像力を必要とする走太の発言だが、一年以上も付き合っていれば耐性もつく。ここで理解しようと頭を働かせても疲れるだけだと、桃河は十分に心得ていた。

深々と息を吐き出したあと、

「なんで戦う以外の選択肢が出てこないんだよ。知ってるだろ？」

メンドーなのは嫌いなんだよ、俺は」

しかめっ面を作ってぶっきらぼうに答えると、走太は緊張していた頬をふっと緩めた。

「そうは言うけど、桃河は僕が困ってるといつも助けてくれるよね？」

「好きで助けてるわけじゃないって俺もいつも言ってるだろ」

「わかってる。見るに見かねて、なんでしょ？ 桃河って優しいよね」

「ぼっ……！」

狼狽えたように、声を詰まらせた桃河と。

ついさっきまで纏っていた緊張感など欠片も見えない顔で微笑む走太。

二人が出会ったのは去年の四月。入学してまだ間もない時期のこと。

校内でうっかり迷子になっていた走太を、偶然通りかかった桃河が成り行きで目的の場所まで連れて行ったことが始まりだった。以来、なんの因果か桃河は行く先々で——しかも決まって何かに困窮している走太に遭遇した。絵に描いたような八の字眉で困った顔をしている走太を見て、桃河が思わず手を貸してしまったのは一度や二度ではない。

そうこうするうちに時は過ぎ——クラスを同じにしてからも、自然と時間を共有するようになっていまに至るのだが。

こうして純真無垢な眼差しで賛辞を述べられるのに、桃河は未だ

に慣れないでいた。仕方なく手を貸している気であるのに、面と向かって優しいだのと言われるのは、どうにもむず痒くてならないのである。

決まりが悪くなった桃河は、依然として右手を掴んで離さない走太の頭を、空いている方の手で叩いてやった。

腹いせの代わりに叩かれた額を両手で覆い、走太はむうと頬を膨らませる。次いで開きかけた抗議の口を、桃河が開放された手をパタパタと振って遮った。

「ほら、先生来たぞ」

前方に目を向けると、ちょうど教室に担任が入ってきたところだった。前を向けとなおも無言で促され、走太は恨みがまし気な視線を残しつつ、渋々と前に向き直った。

【4】

外に出ると、空は見渡すかぎりの厚い雲に覆われていた。湿り気を帯びた風がするりと桃河の頬を撫でていく。

降りそうだな――。

朝の予報では一日快晴だと言っていたのに。おかげで今日は傘を持参していない。桃河は気まぐれな空模様を一瞥して校舎を後にした。

校舎の出入り口から校門までは、ほぼ一直線。右手に等間隔で植えられた桜の並木が続いている。春ともなれば枝いっぱい薄紅色の花を抱える木々も、いまは葉色を紅く染め上げ季節を彩っていた。並木の合間から見えるグラウンドからは、運動部の威勢のいい号令や息の合った掛け声が聞こえてくる。

どこの部にも所属していない桃河は、放課後はまっすぐ家に帰ることが多かった。たまに走太に付き合っけて寄り道をすることもあるが、今日はその同行者もない。終業を告げる鐘が鳴り終わると――彼にしては極めて珍しく――挨拶もそこそこに教室を飛び出して行ったのだ。そういえば走太は朝も遅刻ぎりぎりだった。天気が崩れたのは、よもやその所為だったりしないかと考えて桃河はこっそり含み笑った。

校門を出て、桃河は何も考えずに進路を右に取った。高校に入学してから、ほぼ毎日同じ道を往復している。もう意識せずとも足は自然に動くようになっていた。

桃河の家は学校から歩いて三十分程度のところにある。自転車で通学することも可能な距離だが、自転車の通学許可証を発行する手続きが面倒で、桃河は一年のころから徒歩通学をしていた。

以前、たった一回の手間を惜しんで、毎日片道三十分を歩く方が面倒じゃないのかと走太に聞かれたことがあった。しかし、ものにはタイミングというものがある。それを逃してしまうと、その一回

の手間の方がよほど億劫に感じられる——というのが彼の持論だった。

「でも、やっぱこんな日は自転車チャリの方がいいかもしれないなあ」

また少し風が冷たくなつたのを感じ取って、桃河は首を縮めた。

急げば降られる前に帰り着くだろう。歩調を速めようと足を踏み込んだとき、桃河の体の奥がどくと音を立てた。

「……なんだ？」

急にざわつきだした胸に手を当てて、なんとなく周りを見渡してみるが、これといって目につくものはない。

これは……ひょっとして不整脈？

妙な圧迫感に首を傾げた桃河は、ひとつ深呼吸を試みた。不整脈が出たときは慌てたりせず、まずは落ち着くことだと祖父が言っていたのを思い出したからだ。過剰に反応するとかえって動悸が速まったり、過呼吸になることもあるらしい。亀の甲より年の功。幼いころから祖父母に懐いていた桃河には、祖父が繰り返し口にする「教え」がよくよく染み込んでいた。

深い呼吸を数回試すと、波はゆっくり凪いでいった。やはりお年寄りの言うことは馬鹿にできない。

「不整脈って確か、寝不足とかでも出たりするんだよな。夕べの夢見が悪かった所為かあ？」

呟きながら桃河は今朝見た夢のことを思い出した。

一週間ほどまえから桃河はおかしな夢を見ていた。起きてしまうような内容だったかは思い出せない。毎回違う夢である気もするし、まったく同じものを繰り返し見ている気もする。ただそれを無理に思い返そうとすると、吐き気が込み上げてきて、朝から胸焼けした気分になるのだ。

だが今朝の夢だけはいつもと少し違っていて、うつすらと覚えていることがあった。

深い闇の中を歩く自分。何かとてつもなくひどい後悔に苛まれ、ぼろぼろになっていた。ふいに誰かに呼ばれた気がして振り向くと、

そこにはいくつかの光があった。「彼ら」は、いつも傍にいてくれた大事な存在だった。自分にはそれがわかった。光は寄り添うように隣に並んで、何かをひとこと言い残すと急に輝きを強くした。光はすべてを真っ白に塗りつぶして……そこで目が覚めた。

暗闇の中を歩いていたのが本当に自分であったのかはわからない。その光景を違う場所から見ていただけなのかもしれない。けれど――。

目覚めたとき、残り香のように漂っていたのは強い郷愁感だった。そして桃河は何故だか急に目の奥が熱くなって大いに狼狽えたのである。

「まったく、なんだってんだよ……」

思い出して、またおかしな気分になりそうになった桃河は頭を左右にふった。それから、わざと大腿に歩いて、大通りに抜ける道をいつもと逆の方向に曲がった。裏通りへ入り、さらに人気のない道へと進入していく。

意図的に帰りの道筋を変えたわけではなかった。無意識に体がその方向へ向かっていたのだ。それが当然のことであるように。だから桃河も気がつかなかった。自分がどうして毎日の往復路を外れているのか、いったいどこへ向かって歩いているのか、少しの疑問を持つこともなく。ただ導かれるまま――。

気が付いたときには、桃河は人通りのない路地裏まで入り込んでしまっていた。

「俺、なんでこんな所にいるんだ？ ていうか、ここ何処だ？」

キョロキョロと辺りを見回してみるが、その景色に見覚えはない。

「――げ。地元で迷子かよ」

とはいえ、桃河がいまの地に移り住んだのは中学を卒業してからである。両親の海外赴任と志望した学校が近いという二つの理由から、祖父母の元で暮らし始めてまだ二年と経っていない。むしろまだ踏み込んだことのない区域の方が多くらいだった。しかし屈辱的なのは変わりない。桃河は愕然とその場に立ち尽くした。

とりあえず突っ立っていても仕方がない。徒歩でここまで来たのだから、それほど学校からも離れていないはずだ。そう見当をつけた桃河は踵を返して歩き始めた。

が、その行く手はすぐに阻まれてしまった。

ふいの衝撃と小さな悲鳴。

半歩退いて踏み止まった桃河の鼻先で、華奢な体がよろめいた。

「あ——」

咄嗟に手を伸ばして、桃河は。

思わずその細い腕を掴んで引き寄せていた。

遠くの空で、時を刻む鐘が鳴った。人知れぬ邂逅を告げた音韻は、風に乗って二人の間を吹き抜けた。

【5】

わき道から勢いよく飛び出してきたのは、桃河と同じ年ごろの少女だった。

紺地に白い襟と清楚なリボン。どことなく上品な感じのする制服がよく似合っていた。腰まである豊かな黒髪は驚くほどに艶やかで、透き通るような白い肌がうっすらと上気しているのは、彼女が走ってきたからだろう。見開かれた瞳がかすかに揺れる。

「あ、わりい」

桃河は、慌てて掴んでいた腕を放し両手を挙げた。

他意はないという意思表示が伝わったのか、少女はそっと息をつき、ようやく緊張を解いた。

「……ね」

ぽそりと呟かれた言葉が聞き取れず、桃河が「え？」と聞き返すが、

「ごめんなさい。なんでもないの」

少女は小さく首を振り、それよりも……と改めて桃河に向き直った。

「あなたはここで何を？」

「あ？ いや……」

予期せぬことを聞かれて、思わず口ごもる。何をと言われてもなんとも言えない。

目を泳がせる桃河に少女は固い口調で言った。

「いまこの辺りは危険よ。早く帰ったほうがいい」

「いや、俺もそうしたいけど、帰り道がわか……っ」

わからないと言いかけて、桃河ははっと口を噤んだ。高校生にもなって——しかも地元で——迷子になったなどと恥ずかしくて言えるかと胸中で嘆く。桃河は妙な自尊心に駆られて、うまく言い逃れができないものかと頭を巡らせた。

急に黙り込む桃河を、疑わしげな視線が見上げる。

桃河より幾分低い位置にある少女の面差しは、文句のつけようもなく整っていた。なめらかな曲線が描く相貌は、目も鼻も口も奇跡的なバランスで配置されている。ありふれた表現をするなら、よくできた人形のような造作だ。しかし彼女からは作り物の無機質さなどまるで感じられない。触れずともわかる柔らかな頬、深く透明な黒の瞳、楚々とした鼻筋の下に咲く桜の唇――そのすべてが余すところなく瑞々しい輝きを放っていた。

そんな相手に間近で見つめられては、桃河でなくとも胸が高鳴る。心の裏側まで見通されそうな追究の眼差しに、桃河はぐっと喉を詰まらせた。見えない汗がダラダラと大量に流れ出る。

そんな桃河の心情もお構いなしに、少女はさらりと禁句を口にした。

「ひょっとして、迷子なの？」

「ち、違っ！ その、俺は普段通りに歩いてたんだ。それが、気が付いたらこの辺を歩いてて……だから別に道に迷ったとか、そういうんじゃないって、つまり――」

「迷子なのね？」

しどろもどろの弁明も徒労に終わった。確認するように問われては、もはや言い逃れもできない。ぐうの音も出ない桃河は降参するように脱力した。

些か傷ついた様子で項垂れる桃河に、少女がくすりと肩を震わせる。

「おもしろい人ね、あなたって」

「そんなに笑ってくれるなよ、俺だって恥ずかしいんだぞ」

苦い顔で桃河が言うのと、余計におかしかったのか少女はころころと笑い始めた。軽やかに弾む彼女の声が、耳朶に触れてこそばゆい。

桃河は自分の髪をぐしゃりと搔いて、

「あー。そういうば、この辺って何かあるのか？ さっき危険がどうとかって」

話題を変えようと少女に問いかけた。

すると一転して彼女の端整な顔が凍りついた。スカートの裾をひるがえしその身を反転させる。長い黒髪が、あとを追って踊るようにしなった。

少女の見据えた先で、若い男がこちらに顔を向けて立っていた。いつからそこに居たのだろう。その瞳を見た瞬間、桃河は言い知れぬ違和感に襲われた。纏わりつくようなザラつく気配に全身が嫌悪し急激に動悸が早まる。胸の奥に焼けつくような痛みが走った。胸元を掻い掴んだ指先が凍えるように冷えていく。

少し色の落ちた短い髪。ロゴ入りの黒いウィンドブレーカーと履き古したジーンズ。そこに居るのはなんの特徴もない、どこにでもいそうな若い男。

なのに。

瞠目したまま、桃河は男から目を逸らすことができなかった。形のない何かもやもやしたものが肺腑を重くする。

男がゆらりと歩を進めた。

「逃げて」

緊迫した少女の声が、膜を張ったようにくぐもって聞こえる。体中の血液がうねりを上げて警鐘を鳴らしていた。

……あれは、在ってはならないものだ。

眩暈にも似た焦燥感に目が霞む。もう少女の声も聞こえなかった。刹那。脳裡に流し込まれる光景があった。

——辺りを包むのは、灯火に照らされるゴツゴツした冷たい岩肌と、息遣いさえも反響する静寂。

そして、微動する、闇。

輪郭を持たず脈動するそれは、禍々しくおぞましい。耳の奥で怨ずの唸りが木霊する。

『覚エテ……オレ……』

——……っ！

意識が飛んでいたのはごく僅か。

はたと目を瞬くと不明瞭だった視界がはっきりした。粟立つほどの不快感が濃度を増して漂っている。桃河は声を上げようとして、それができないことを知った。

身なりだけはそのままに、男の様子が一変していた。

目を疑う。もはやそこに「どこにでもいそうな」若い男など存在していなかった。

精彩を欠いて土気色に転じた肌。骨が浮き出るほど肉の削げ落ちた頬。だらりと下げた双手の爪は獣のように伸びて変色している。無表情のくせに剥き出しの剣呑さを含んだ眼光が桃河を射抜く。その両の眼は血の色よりも赤く染まっていた。変わり果てた男の額――髪が生え際に奇妙なものが突き出ている。

目前まで迫った男の口角が不気味に歪んだ。

ずっと早鐘を打っていた桃河の胸が一際大きく跳ねた。

「……お、……っ」

桃河の耳に、間近で息を呑む音が届く。それとほぼ同時だった。背中に冷水を浴びせられたような感覚に襲われて、桃河はとっさに身を返した。

最初の一撃を躲すことができたのは、奇跡とも言うべき幸運だった。あるいは極度の緊張状態のせいで神経が過敏になっていたのかもしれない。

桃河は眼前に迫り来るものを捕捉すると、反射神経に任せて体を捻った。脇を掠める衝撃に声なき悲鳴を上げる。体勢を整える間もなく、再び凶器が唸りをあげた。繰り出される追いうちに足が纏れる。

一撃でも当たったら、終りだ。

強張る四肢を叱咤して、桃河は身を躍らせた。耳の奥で聞こえる激しい鼓動が、遠退きそうになる意識をギリギリで保っている。後退った足が地を滑り眼界が大きくぶれた。

「——っ！」

瞬間、頭が真っ白になって何も見えなくなった。だから桃河は自分が気を失ったのだと思った。

それが目を瞑っていたせいだと気づいたのは、鼓膜を突き破るような甲高い音が響いたあとだった。

【6】

「冗談、だろ……？」

発した言葉は、渴いた喉に張り付いてほとんど音にならなかった。全身に纏った冷たい汗が体から熱を奪っていく。肺が酸素を求めて喘ぐのに呼吸が上手くできない。

赤い眼が、ぐると桃河を取り囲んでいた。

仰ぎ見た数人の男たちは、誰ひとりまともな姿をしていない。手にはそれぞれ武器を携え、こちらを無感情に見下ろしている。

桃河の真正面に立つ男の手には、長年使い込んだ感じのする合金製のバットが握られていた。無残な形に姿を変えて、もう本来の目的で使うことはかなわないだろう。俗に言う金属バットの強度がどれほどかは知らないが、形状を変えてしまうほどに強い衝撃が与えられたのは確かだった。

桃河の傍らに立つオレンジ色の柱には真新しい傷が刻まれている。強かに落ち窪んだそこは、塗装が剥げて黒くなっていた。上部に取り付けられたミラーが、まだ余韻を残して震えている。

あ……ありえない。

青天の霹靂とは、こんなときに使う言葉なのだろう。突きつけられた現状は、あまりにも非常識すぎて。桃河の頭で理解できる領域を軽く突き抜けていた。

十七年間。桃河は多くの一般人と同じく地味に平穏な日々を送ってきた。人生を終えるときまで変わることのない、それが在るべき己の日常だと漠然と信じていたのだ。もちろん、今日まで自分が金属バットで襲撃される日が来るなんて思いもしなかった。運悪く——この場合は運が良かったとも言えるが——バランスを崩して転倒していなければ、渾身のフルスイングは間違はなく桃河に直撃していたはずだ。折れ曲がった凶器と、身代わりになったカーブミラーの鉄柱を見れば一目瞭然。下手をすれば、命を落としていたか

もしれない。

桃河はアスファルトに突いていた手を固く握り締めた。

知らなかった。あたりまえの日常が、こんなにも脆いものだったなんて。悪い夢なら早く終わってほしいと、桃河は切に願った。しかし倒れたときに擦れた手のひらがじわじわと痛んで、現実から目を逸らすことを許してくれない。

いつのことだったか、現実逃避などするだけ時間の無駄だと祖父に諭されたことがあった。どんなに具合の悪いことだろうが、受け入れなければ一歩も前に進めない。よそ見をしても所詮はその場凌ぎにしかならないのだから、目を瞑って突撃するぐらいの気概を持って。そんな厳しいことを言いつつ穏やかな祖父の顔が浮かぶ。隣にはいつも祖母が微笑んでいて、今日もきつと手製の甘団子を用意して桃河の帰りを待っているだろう――。

「何してるの、早く立って！」

夢うつつの頭に、霞をはらう凜とした声が響いた。それを合図に、止まっていた時間がいつせいに動き出す。

はっと意識を上げた桃河の目に飛び込んできたのは、高々と振りが上げられた鉛色の鉄管。桃河は弾かれたように身を起こし、声のした方へ駆け出した。飛び退いた場所を、空を切った凶器が勢いよく打ちつける。

耳障りな金属音が耳に届き、桃河は顔をしかめた。

「鉄パイプなんてどっから拾ってきたんだよっ！」

大音声で愚痴るが、それに応える者はない。後方からは声高な唸り声が聞こえてくるばかりだ。

もう勘弁してくれよ！

桃河は自分を先導して走る人物を見やった。

緑髪をなびかせる少女の背中。桃河は、彼女ならこのありえない現状を説明できるのだと直感した。

「なあ！ あいつら何者——っ」

「話はあとよ！ いまはとにかく走って！」

ぴしゃりと言いつ放たれて、それ以上問うことはできなかった。少女は振り返ることなく前だけを見て走っている。

知りたいことは山ほどあった。だが、いまは逃げるしかないらしい。桃河は乱れた呼吸の中に諦めの吐息を混ぜた。

ふと、一時間ほど前に別れた級友の顔がよぎる。ここにあいつがいたら、どんな顔をするだろう。見る人を無条件に和ませてしまうと評判の、タンポポの綿毛みたいに柔らかな笑み。見飽きるほどに慣れ親しんだ顔なのに、なぜか無性に懐かしかった。

もともと長い距離を走るのは苦手だった。

年に一度のマラソン大会や体育の授業でも、結果は後ろから数えた方がだんぜん早い。だいたい、あえて苦しみに耐えつつ走るという自虐的行為になんの意味があるのか。持久力を養うためと体育教師は言うが、そんなものは毎日の積み重ねで自然と培われていくものだろう。授業の中で少しばかり走ったくらいではなんの足しにもならないと、ずっとそう思っていた。

でもそれは、要するに「逃避」だったのだ。辛くて苦しいから、それらしい理由をつけて逃げていただけ。一度も真剣に向き合おうとしなかった。

けれど人生は何が起こるかわからない。

もしあの苦痛としか感じられなかった時間が、今日という日のためにあったのなら。少しは真面目に取り組んでおけばよかった——のかもしれない。

酷使された筋肉が悲鳴を上げ、心肺機能が限界に達しようとしたころ。

桃河が足を踏み入れたのは、近隣住民の憩いの場所だった。四季折々の草木が茂る広い敷地に、運動場や植物園などを備えた市営公園。どこをどう走ってきたのかはまるで覚えていないが、ここから祖父母の待つ家まではあと少しだ。知った場所というのは、それだけで安心できる。自然と桃河の足取りも緩んでいた。後ろを振り返って確認してみても脅威はもう感じない。上手く逃げおおせたのだ

ろう。

夕方の公園は人気もまばらで静かだった。中心地にある大きな池には水鳥がぷかぷかと浮かび、ときおり白い羽をバタつかせている。足元には赤や黄色の葉に混じって、たくさんのもんぐりが転がっていた。

綺麗に舗装された遊歩道を進むうち、桃河の中で嵐のごとく荒れ狂っていた波は漣へと変わり、やがて凪いだ水面にぽつりぽつりと波紋が広がった。

さっきのアレはなんだったのか。

道すがら小さな犬を連れて散歩をする人や、肩を寄せ合って歩く楽しげな女子高生らを見ると、さっき目にした光景など嘘のように思えるのに――。

池のほとりに設置された木製のベンチに桃河は倒れこむように腰を下ろした。座ってみると、想像以上に疲労していたことを自覚する。しばらくは立ち上がれそうもない。背もたれに体を預けるようにして空を仰ぎ、肺が底を尽くまで息を吐き出した。

「あー疲れたあ……。なんだったんだよアイツら。ていうか、見た目からして普通じゃなかったよ、な」

枝葉の間から見える曇天は不穏に渦巻いている。できることなら、いまずぐ帰宅して寝たいというのが桃河の本音だった。だがこのままではとても安眠などできないだろう。

「あれは、鬼よ」

桃河の独りごとのような問いかけに、背後から回答があった。

声の主を求めて振り向くと、憂いを含んだ横顔が遠くを見つめていた。桃河と同じ距離を走ってきたはずなのに、芯の通った立ち姿には疲弊の色が見当たらない。彼女の背に沿って落ちる髪は、丁寧に櫛を通した直後のような光沢を帯びていた。

「お、に……?」

自分の口から紡がれた単語が己の胸を叩く。

長く尖った両手の爪と、醜く歪んだ口元から覗く鋭利な犬歯。赤

い狂気を光らせてバットや鉄パイプを振りかざす形相は思い返しても背筋が冷えた。それだけでも十分人間離れしているというのに、彼らの頭部には前髪を掻き分けて雄牛のようなツノまで生えていた。黒光りする二本のツノを頂いた姿は、まさにお伽噺に登場する想像上の怪物そのものだ。

記憶の中で、鬼の象徴たる異形の証が鈍く光る。

あ、ありえねえ……。

いまや時は二十一世紀。宇宙旅行も夢ではなくなったこのご時世に、すんなり鬼の存在を受け入れられるほど桃河も幼くない。

なんの冗談だと言わんばかりに、桃河は片手で顔を覆った。

「目に見えたことが真実よ」

少女が、くると向き直って桃河を見た。桃河の胸のうちを正確に読み取って、通りのよい声が空気を揺らす。

「驚くのも無理ないけど、鬼はずっと昔からこの世界に実在していたのよ。ただ、その姿が人の目に映ることがなかっただけ」

「……どういことだよ」

「そのままの意味よ。鬼は闇から生まれ人に憑き人を惑わすの」

「人に憑く……取り憑かれるってことか？」

桃河が聞くと、少女は「そうよ」と短く首肯した。

「そして鬼に憑かれた人間は、理性を失くし衝動的な殺人や破壊行動に駆られてしまう。鬼は、そうして得られる人の痛み——悲しみや恐怖を糧に古来より生き続けてきたのよ」

「んな馬鹿な。もしそれが本当なら、どうして誰も奴らのことを知らないんだよ。鬼が人間に取り憑いて人を襲ってるなんてマスコミが黙っちゃいないだろ」

「言ったでしょう？ 鬼は、人の目には映らないって。憑かれた本人も周りの人間も気がついていないだけなのよ」

それに——。

と、少女はいったん言を切り息を継いだ。その明眸にわずかな陰を滲ませ言い繋ぐ。

「ニュースなら毎日のように流れているわ」

「は？」

「かっとなって刺したとか、むしろくしゃしてやったなんて、よく聞くでしょう？ ウサ晴らしや突発的な感情の暴走による殺傷行為の大半は、鬼憑きによる一時的な理性の消失によるものよ。他にも、常人には想像のつかない理由で故意に他人を傷つけるような事件の影には、ほぼ間違いなく鬼が潜んでいると考えていいでしょうね」

……え？

衝撃は、やや遅れてやってきた。何を言われたのか、すぐには理解できなかったからだ。言葉の意味は、じわじわと時間をかけて染み渡った。

少女は囁くように言った。

「鬼はそこにいるの。私たちのすぐ隣に」

ざわり。と空気が動いた。葉の擦れ合う音がざわめきとなって周囲を包む。穏やかだった池の表面が俄かに波立ち、水鳥が慌しく飛び立っていった。

「個人的な欲求のためだけに他人を傷つける。生ある者の命を奪う。それが、人間のすることだと思う？」

ざあっと音を立てて血の気が引くような錯覚。世界が揺れて桃河は一瞬、立ち眩んだ。

——『もしも、人の心の隙間に入り込んで悪さをする奴らがいたら、桃河はどうする？』

丸い目を精いっぱい緊張させた級友の声が頭の中で反響した。それを引き金に教室で戯れに交わした会話の切れ端が再生される。

——『ひょっとしたらどこかで擦れ違ってるかもしれないよね』

——『昨日もテレビで見たよ。子供が家族を刺して家に火をつけたとか、男がいきなり刃物を振り回して暴れ出したとか』

——『クラスメートがある日突然、鬼と化す——かあ』

「鬼は血と破壊を好み人の嘆きを啜って生きる魔性の存在。人の中の小さな蟠りも暗く澱んだ殺意へと駆り立てる。鬼に憑かれた人間

は、人の心も忘れて兇鬼きようきと成り果てるのよ」

びくりと肩を震わせて、桃河は息を詰めた。

とんでもないことを聞いてしまった。平穏な日常に浸かっていたのなら知らない方がよかったはずだ。こんなこと、信じたくはない。だが桃河にはもう彼女が嘘を言っているとは思えなかった。

「つまり最近のイカれた事件は、みんな鬼に憑かれた人間の仕業だったってこと、か」

「全部がそうだとは言わないけれどね」

「じゃあ、さっきの奴らは？ あいつらは他の鬼とは違うのかよ」
少女は最初に彼らを「鬼」と呼んだ。あれを鬼と呼ぶのなら、彼女の話と根本的に食い違う。なぜなら鬼は人の目で見ることができないからだ。桃河を襲った男たちは、徒人とは思えない異形だった。人を傷つける行為にもなんの迷いもない。冷たく光る瞳の奥にはうつすらと愉悦の色が混じっていた。あの姿では、他の人間に知られるのも時間の問題だ。まず明日の新聞の一面は間違いないだろう。

「驚いた。気がついてなかったのね」

少女は虚を衝かれたように目を丸くした。

「何がだよ」

「彼らが特別なんじゃないくて、あなたが特別なんだよ」

「俺はただの善良な一般市民だぞ」

「単刀直入に言えば、あの場所で『あれ』を目視できていたのは、あなたただけだということよ。私だって気配でそれとわかるだけで、鬼の姿なんてまだ一度も目にしたことはないわ」

「は？ 俺だけって……え？ なんだよ、それ」

桃河はぼかんと少女を仰ぎ見た。もう少し詳しい説明を願いたい。そう気持ちを込めたつもりだったのに、彼女の返答は明後日の方向から飛んできた。

【8】

「桃の実から生まれた異端児の話は、知っているかしら」

「はあ？」

噛み合わない会話に困惑が拍車をかける。あからさまに眉をひそめる桃河を、少女は面白そうに覗き込んだ。

やたらと吸引力のある瞳に捉えられ、桃河の左胸が小さく跳ねる。桃河は反射的に視線を逸らして口早に答えた。

『桃から生まれた子ども』といえば、連想されるものはおよそひとつ。

日本一有名と言っても過言ではない勧善懲悪の見本。絵本はもちろん、漫画やドラマのモチーフとしても使われているから、大人から子供まで知らないものは少ないだろう。

知名度のわりに発祥は曖昧で、いつごろ、誰の手によって書かれたものなのか正確なことはわかっていない。大本は日本神話であるとか、実在の人物がモデルだという説もある。その内容は地方によって少しずつ異なったりもするが、一般的な話の流れは桃河もよく知っていた。

それは『昔々あるところに――』から始まる和製ファンタジー。

ある時、川上より流れてきた桃の中から男児が生まれ、心優しい老夫婦が育てるようになる。やがて成長した少年は、悪行の限りを尽くす鬼を退治するために旅立ちを決意。そして旅の途中で出会った仲間と共に、みごと鬼ヶ島に住む鬼たちを討ち倒す。最後は『めでたしめでたし』と締めくくられ大団円で終わるのだ。

言わずと知れた物語のタイトルを告げると、少女は満ち足りたとばかりに頷いた。

「そう。彼は誰もが知る鬼退治のエキスパート。鬼の悪行から人々を救った英雄よ。鬼と戦うことは生まれる前から決まっていた彼の宿命なの。たとえば、器が変わっても魂の宿命さだめが変わることはない」

「……で、それがどうかしたのかよ」

「あなたが人の中の鬼を見通せるのはね、その器に英雄の魂が宿っているからよ」

頭の中が「？」マークでいっぱいになる。確かに日本語を話しているはずなのに、彼女の言っていることの意味がまるでわからない。桃河は浮かんだ疑問符をそのまま投げかけた。

「なんだ、それ？」

「あなたが特別だという理由よ」

「っじゃなくって、器とか魂とかってやつだよ。話が見えなさすぎるだろ」

桃河の眉間に入った縦ジワに、少女は「仕方がないわね」と笑って肩をすくめた。

「もうあまり時間もないんだけど……」

ふっと呼気を漏らし、眦を決する。

「いい？ よく聞いて。さっき私たちを襲った鬼たちも、いま、あちこちで事件を引き起こしている鬼も同じよ。あれは、かつて英雄に討たれた鬼の残滓が、長い年月をかけて具現化したものなの」

——桃の実は、邪鬼を圧伏する力を宿す仙木の果実。

仙果の内より生まれ出でた少年もまた、邪鬼を祓う力を持っていたという。

鬼ヶ島に乗り込んだ少年は、供の助力と己の全力をもって、悪鬼たちと干戈を交えた。

文字通り命を削る激戦の果て、ついに彼は諸悪の根源たる鬼を滅びの淵へと追い詰める。

崩れ逝く異形のからだ。おぞましき叫喚。

そのあとに残ったのは、息遣いさえも反響する静寂だった。

戦いは、そこで終わりを迎えたかに思えた。

そのとき、朽ちた鬼の体から黒い靄が噴き出した。靄は、渦を巻くように集まり闇の塊となった。鬼の骸を呑み込んで、ひとつ鼓動

する。

闇の中から声が聞こえた。硬い岩肌に弾かれて、血も凍る怨声が木霊をつくる。

覚エテオレ……愚カナ、人間ヨ……。

それは倒れたはずの鬼頭の声だった。

戦慄が駆け抜ける。少年に、もはや余力はない。

されど悪鬼の姿はどこにも見えず、ただ声だけが冷たく響く。

己の心臓を貫いた憎き仇を呪う言の葉が幾重にも幾重にも満ちたのち、闇は跡形もなく掻き消えた。鬼の骸を抱いたまま。あとには、何も残らなかった。

災いの源が滅び、人々は訪れた平和に歓喜した。鬼を退治した少年は英雄と謳われ、後の世にまで語り継がれるようになった――。

「年若き英雄の物語は、それで終わったと思っていた。誰もがそう思っていたわ。でも、彼の倒した鬼は完全に滅んだわけではなかったの」

鬼ヶ島の戦いから長い年月が過ぎ去り、人々が彼と鬼との戦いを忘れてしまったころ――奴らは現れた。人の心の闇に根づいて成長する形のない化け物として。

「心の、闇？」

黙って耳を傾けていた桃河が、そこで口を挟んだ。少女はそれを受け止め、わずかに瞳を曇らせる。

「簡単に言えば『よくない感情』のことよ。強い不安や孤独を感じたり、他人に対して怒りや憎悪の念を向けたときに感じる、陰鬱で重苦しい嫌な気分。鬼は、そういった心の闇に生まれ、闇が深くなればなるほど人の心を蝕んでいくの。……そうして心を蝕まれた人間は、あるとき理性的な判断能力を失い、感情のまま行動するようになってしまう。これが、鬼憑きの正体。奴らは人間そのものを器にして甦ってしまったのよ」

「ちよっと待てよ。なら、さっきのあいづらがその退治損ねた鬼だ

つていうのか？ そんなのただのお伽噺だろ？」

「あら。お伽噺がすべて作りごとだとは限らないでしょう？ それに、あなたはもうその目で確かめたはずよ。これがただのお伽噺なんかじゃないってことを」

彼女が何を言わんとしているのか。今度はすぐにわかった。

昨日までフィクションだと思い込んでいた存在は、すでに現実として桃河の前に現れている。論より証拠となるものを先に突きつけられているのだから、口先だけの反論などできるわけがない。

開きかけた唇を嚙んで桃河は小さく唸った。

「多かれ少なかれ、人の心の中には闇がある。それでも、すべての人間が鬼憑きになるわけじゃないわ。鬼がその力を強くするのは、人が自分自身の闇に吞まれてしまうとき。そうならないように誰もが自分の中の闇と戦っているのよ。苦しくて辛いけれど、それに打ち克ってこそ内なる鬼を制する強さを得られるの。……だけども、理由はわからないけれど、この世はかつてないほど陰の気に満ちているわ。それが好からぬ影響を与えているせいで闇の深まりが強くなっているの。急激に力を増す鬼たちに、未熟な精神は耐えられない。だから、この数年鬼憑きの数が急増しているのよ。鬼は人を惑わし、人の世に乱を生むわ。そして、人の世が乱れれば、人はまた闇を深くする。そうしてまた新しい鬼が生まれるの。このままいけば、いずれこの国は鬼によって支配されてしまう」

長い黒髪が風に遊ばれ、少女の頬にかかった。髪を掻き分ける下で、桃河を見下ろす双眸が緩やかに細められる。

「だけど――」

形のいい唇が微笑の意を帯びた。

「悪しき鬼を屠るため英雄の魂は輪廻を駆ける。自らの盟約を果たすため、彼もまた新たな器を得て現世に降り立った。それが――あなたよ」

少女の指が、すいっと桃河の鼻先に突きつけられた。

「かの英雄の魂は、いま、あなたの中にある」

きっかり三秒。桃河は瞬きを忘れた。少女と互いを見詰め合ったまま、奇妙な沈黙がしばしの時を埋める。そして理解が追いつくなり桃河は勢いよくベンチから立ち上がった。

「ちょっと待て！ おまえ、いったいなんの話をしてるんだっ？」

「もちろん、あなたの話をしているのよ。もう一度言うわ。あなたは特別なの。遠い昔に人々を苦しめる悪い鬼を倒した――いまもお語り継がれる伝説的英雄。その人の魂を、あなたが受け継いでいるの。あれが鬼に見えたのなら、間違いないわ。鬼を退治する宿命を持った魂の持ち主だから、人に憑いた鬼が見えたのよ」

「だから、どうしてそこに俺が出てくるんだよ！ 百歩譲ってあいつらが大昔に倒し損ねた鬼だったのはいいとして、鬼が見えたのなんてただの偶然かもしれないだろっ？」

頼むからこれ以上、面倒なことに巻き込まないでくれ！

鳥肌を立てながら、桃河は声を張り上げた。こんな戯れ言、信じろという方がどうかしている。そう思うのに、頭の芯が痺れて脈拍がどんどん加速していく。

平凡な人生。ありふれた日常。他人が聞けばつまらないと愚痴をこぼす毎日にも、桃河は十分満足していた。あるがままに生きることに。若年寄と言われようと平穏であることが最高の幸せだった。「特別」なんて望んでいなかったのに。彼女と出会ってから、桃河の常識を覆すことばかりが起きている。

胸の奥にひどいムカつきを感じて、桃河は顔を歪めた。

「なんなんだよ、ホントに。意味がわかんねえよ。いきなり現れておかしいことばっか言いやがって。おまえこそ何者だよ。あいつらのことだって見えてないんだろ？ だったらどうして奴らのこと知ってるんだ。ほかの誰もが知らないのに、なんでおまえは全部知ったような顔してるんだよっ」

捲し立てる桃河に少女は何も答えない。代わりに、ゆったりとした動作で右手を持ち上げた。肩の高さまで上がった腕が水平に移動して、虚空を撫でる。

黒い瞳が瞼に隠れ、静かにそれは始まった。
弧を描く黒髪。

地を滑るような足運び。

指の先までしなやかに伸びた腕。

肃々と、そして艶やかに――彼女は舞った。

【9】

桃河はさっきまで感じていた焦燥も忘れて息を吞んだ。

音もなく舞う少女の周りに淡く輝く光がひとつ、またひとつと生まれる。たゆたう螢火は舞に共鳴するように、ほわりほわりと少女を取り巻いて、優美な舞姿をいっそう雅びやかに演出した。

幾つもの光はやがて集束し、短い舞を終えた少女の手の中には一張の弓が収まっていた。

力強く優麗な曲線。赤褐色の弓幹と、持ち手の部分に巻かれた白い藤の対比が鮮やかだ。派手な装飾もなくシンプルな作りだが、それが纏う重厚な神気は本物だった。

「これは鬼祓いの力を宿す弓、桃弧^{とうこ}。私が見えてもいない鬼の存在を認めているのは、代々この弓を守り受け継いできたからよ」

少女は桃河の傍まで歩み寄ると、手にした弓を恭しく差し出した。長いまつげに縁取られた黒曜石が、艶を増して桃河を見る。

桃河は熱に浮かされたような目顔で桃弧に見入っていた。求めるように手を伸ばし弓を掴み取る。桃弧が淡く発光し脈打つようにびいんと震えた。弓が主を得て歓喜したのか、あるいは、それは桃河自身の震えだったのかもしれない。

瞬きもせず桃弧を見つめる桃河に向かって、少女はそっと声をかけた。

「桃弧を爪弾いてみて？」

桃河は言われるままに弦に指をかけ、それを弾いた。

鳴弦の音が見えない波紋となって広がる。桃河を中心に、立ち並ぶ木々や池の水面が周囲の気と共に振動して、ぴりりと緊張した。瞬間的な重圧感。その場所だけが違う空間になったような感覚が去ったあと、辺りは何事もなかったかのように静まり返った。そして――

「――うおあっ！」

放心状態から醒めた桃河は悲鳴を上げた。手中にある謎の弓と少女とを交互に見返して、

「おま、これ……っ！」

「桃弧は桃の実から生まれた少年が、鬼ヶ島で鬼を退治したときに使っていた弓よ。彼は鬼が再び人の世に現れることを見越して、自分の血を分けた子どもたちにその鬼祓いの弓を託していたの。たといその身が朽ち果てても悪鬼を滅するという誓い（おもい）だけは、魂に刻まれ決して消えることはない。幾度輪廻を駆けようとも、我が魂を持つ者は必ず悪鬼を討ち滅ぼすだろう。もし自分がいなくなつたあとの世界で、鬼がまたこの地を荒らすことがあれば、魂の継承者を求め桃弧を授けよ——とね」

それからずっと、彼の子どもたちは桃弧を守り続けてきた。子から孫へ孫からまた子へと子々孫々に渡り、桃弧の守り人として。いつかその力が必要になつたとき、違えることなく桃弧が主のもとに還るように。

桃河はここにきてようやく彼女の正体に思い至つた。

日本で最もポピュラーなお伽噺の、しかし誰にも語られなかった真実。そんなことをこれだけ誇らしげに話す少女が誰なのか。

目を見張る桃河に気づいて、少女の口元が小さく緩んだ。

「そうよ。私は英雄の血を引く一族の末裔。私が鬼の気配に敏感なもの、まさに血のなせるわざ。——でも、彼の血を受け継ぎ桃弧の守護者である私たちにも、その弓を引くことはできない。それができるのは桃弧の主となる者だけなのよ」

白くたおやかな指が伸びてきて、桃河の持つ弓の背にそっと触れる。

「あなたはいま桃弧の力を発現させ結界を張って見せた。それこそが、あなたが桃弧の主たる魂の持ち主だというまぎれもない証」

「けっ、けっかい？」

「不可視の壁によって隔離された特殊な空間のことよ。感じない？ 私たちはいま、その結界の中にいるのよ」

結界はその場所の時間を瞬間的にずらすことで発生する。この時間のズレが見えない壁となって外界からの干渉を拒むのだ。徒人が結界を感知したり、間違っただけに入らなこともない。完全な不可侵領域。いまここに誰かが通りかかったとしても、桃河たちの存在に気づく者はいない。結界とは限定的な並行世界のことである。異なる時間軸を持つ二つの世界は決して交わらない。だからこの中で何が起きようとも結界の外には作用しないのだと彼女は言う。

言われてみれば、しきりに聞こえていた鳥のさえずりも葉擦れの音もなくなっていた。なんとなく清澄な気が張りつめているような、そんな気配がする。

でも——そんなたいそうなものを、本当に俺が？

桃河は自分の手中に収まる古弓を初めて正視した。

弓なんて触ったこともないはずなのに、なぜかその手触りを懐かしく感じる。覚えのない重みにこんなにも安堵してしまうのは、どうしてだろう——。

表現しがたい感情に戸惑う桃河を、少女はまっすぐに見つめた。

「まだ信じられない？　けどもう、そんなことを言っている暇はないわ」

ぞくりと悪寒が駆け抜けた。とっさに背後を顧みて、絶句。桃河は自分が最大の窮地に立たされていることを知った。

いつの間にか、片手では足りない数の人影に包囲されていた。

全員が鬼に憑かれている。桃河にはそれが目に見えてわかった。

中にはさきほど桃河たちを襲撃した男たちも混じっている。

少女に背を向け、桃河はそれらと対峙する格好で叫んだ。

「おい、ここには結界とやらが張られてるんじゃないわ。あなたが結界を張ったとき、鳴弦の音の届く範囲内にいたのよ。恐らく私たちを追ってきて結界に捕らえられたんでしょね」

不自然に体を揺らしながら近づいてくる彼らの様子は、糸の見えないう操り人形のように不気味だった。じりじりと包囲網が狭められ、

桃河たちは少しずつ後退を余儀なくされる。

「この結界の役割は、外部への不要な被害や目撃者を出さないようにすることと、もうひとつ。奴らを閉じ込めて確実に仕留めるためにあるの」

仕留める――。まるで猛獣か何かを相手にするような容赦のない言いように、桃河は危険なものを感じ取った。思わず少女を振り返り、

「それってまさかあいつらを――」

「残念だけど、彼らは鬼に憑かれて完全に我を失っているわ。ああなった人間は、鬼の意のままに操られる傀儡と同じ。捨て置けば、彼らは鬼と同化して、」

「ま、待てよ！　いくら鬼が取り憑いてたって、あいつらは人間だろう？　んな簡単に切り捨てちまうのかよ。そりゃ鬼に憑かれたのはいつら自身の問題かもしれないけど、望んであなつたわけじゃないだろ。そんな一方的に終わらせる以外に方法はないのかよ！」
急に強い反発をぶつけられて少女は驚いたように目を見張った。
しかしすぐに、今度はこっちが面を食らってしまうほど綺麗に微笑してみせた。

不意打ちのカウンター攻撃に、桃河は状況も忘れて為す術なく赤らむ。

「方法は初めからひとつしかないわ。あなたが、彼らの中に巣食った悪鬼を討てばいいの。そうすれば、彼らは解放される」

「解放？　なんだよ、俺はてつきり――って、いま、なんて言った？　俺が、なんだって？」

「彼らのように身も心も鬼に奪われた人間を、からおに虚鬼と言うの。虚鬼が完全に鬼と同化してしまったら、二度と人間に戻ることはないわ。その前になんとしても鬼を浄化しなければならぬ。あなたはこの世で唯一、鬼を討ち滅ぼせる力を持った人。あなたがその弓で奴らを射抜けば、彼らは人の心を取り戻せる。彼らを救えるのはあなたしかないのよ」

「な、お、俺がつ!？」

予期せぬ事態にぎよっとする桃河。

そこへ呼吸を計ったように一人の男が飛びかかってきた。

「——っ!」

桃河はとっさに少女を押し退け、持っていた弓を盾に男の攻撃を防いだ。男の武器はコンビニでよく見る透明なビニール傘。一度も使った形跡のない新品だった。これがもっと破壊力のある——例えば金属バットや鉄パイプだったら、ひとたまりもなかっただろう。

「……くっ」

とはいえ、鬼——正確には虚鬼というらしい——と化した男の臂力は凄まじい。大きくたわんだ傘が、手元からぐにやりと折れ曲がった。男が前のめりにバランスを崩す。桃河はすかさず、その腹を力いっぱい蹴り飛ばした。肩で息をしながら、男から離れる。

桃河たちは完全に取り囲まれていた。

真っ赤に染まった幾つもの眼が、獲物を狙って怪しく光る。桃河に蹴られて転がっていた男が立ち上がり、にたりと嗤った。

「冗談じゃねえぞ、んつとに……」

桃河は、桃弧を一瞥して、

「こんな弓ひとつで何をどうしろっていうんだよっ」

「大丈夫。あなたならできるわ」

齒軋りをする桃河の後ろから見当違いの答えが返る。

「だああっ違う! そうじゃなくって——」

内心で頭を抱えた桃河を目がけ、虚鬼の群れは一斉に襲いかかってきた。けたたましい叫声。迫りくる凶器と狂気。桃河の四肢は硬直し、逃げることもできなかった。

今度こそ、もう駄目だっ。

自らの不幸を呪い、桃河はきつく目を閉じた。

しかし予想した衝撃は、いくら待っても訪れることはなかった。
——……？

不思議に思っただけ目を開いた桃河が最初に見たものは。
彼を守るように立つ四人の後ろ姿だった。

……え？

桃河はパチパチと瞬きを繰り返した。

行く手を阻まれた虚鬼たちも突然の乱入者に動揺を示し、警戒色を滲ませていた。威嚇するように低い唸り声を上げ、距離をとってこちらの様子を窺っている。

「絶体絶命のピンチに駆けつけるなんて、ニクい演出ね。登場のタイミングとしては最高だわ」

桃河の後ろでは胸の前で腕を組んだ少女が、なぜかいたく満足げな様子で頷いていた。

どうやら、自分は助けられたらしい。真正面から虚鬼に立ち向かう頼もしい背中が、桃河にとってまさに救世主だった。だがそのことに安堵するよりまず先に気になることがあった。桃河は半信半疑に呟いた。

「そ……そう、た……？」

呼びかけに振り返った姿は、やはり桃河のよく知るものだった。につこりと満面に微笑む顔は、教室で別れたときと何ひとつ変わらない。幼さの抜けきらない丸い顔立ち。少し癖のある栗色の髪。詰襟の学生服に身を包んだ級友は、こちらを覗き込むように小首を傾げた。

「桃河、大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「あ、ああって……え、あ、なん……？」

声を聞くと、まるで長い間会っていなかったような懐かしい思いが込み上げた。だが桃河に再会を喜ぶ余裕など微塵もない。

彼の名前は犬山走太^{いぬやまそうた}。言わずもがな桃河のクラスメートである。走太は桃河よりもずっと前に学校を出たはずだった。にもかかわらず、なぜいま走太はここにいるのか。わざわざこんな——こんな危険な場所にやってくるなんて。どれだけおまえはトラブル体質なんだと思わずにはいられない。のほほんとした顔を見れば、走太が鬼憑きでないことはすぐに分かる。ならばどうしてこの結界の中にいるのだろう。言いたいことも聞きたいことも怒涛のように押し寄せた。しかし、その一切を吹き飛ばす視覚的インパクトを前に桃河は混乱の極みに陥っていた。

「おま、それ……、」

桃河は震える指先で走太の手元をさした。

「ああ、これ？」

走太が掲げて見せたのは。

切っ先まで一分の隙もない、緩やかな曲線を描く細身の刀。幼さが多分に残った丸顔には恐ろしく不似合いなものだった。

鏡のように磨きぬかれた鋼に、青ざめた桃河の顔が映りこむ。

「嫌だなあ。そんな顔しないでよ、桃河。これ対人用じゃないんだから、ホラっ」

それはもうにこやかに。走太はなんの躊躇いもなく自分の腕に刀を押しあてた。

「ばっ」

思わぬ奇行に肝が凍りつく。息を詰めた桃河の目の前で、銀の刃は制服の袖ごと走太の細い腕に食い込んだ。だが不思議なことに血は一滴も流れない。まるで手品でも見ている気分だった。研ぎ澄まされた白刃は、傷ひとつつけずに走太の腕を通り抜けたのである。斬りつけた方の手をグーパーさせながら、

「えへへ。すごいでしょ？」

ね、桃河——と、走太は自慢げに胸を張った。それはあたかも投げたボールを拾ってきた子犬が、主人に頭を撫でてもらうのを待っているかのごとき眼差しだった。

期待に満ちてキラキラと輝く瞳。でもその手にあるのは、銀光弾ける日本刀……。

もう……駄目かもしれん。

くらりと、目の前が暗くなった。

「おいおい大丈夫か、タイショー？」

失笑する第三者の声が、傾きかけた桃河の体を引き戻す。見ると、閉じた扇を片手に構えた青年が、面白そうにこちらを見やっていた。

「二人とも知り合いか？ だったら話が早くていいな。俺は雉野ちのか一飛ずひだ。よろしくな大将」

一飛と名乗った青年は、桃河と目を合わせるとぱちりと片目を瞑ってみせた。切れ長の目。嫌味のない気安い笑み。モデルとしても通用しそうな長身とバランスのとれた体軀に、値の張りそうなジャケットをラフに着こなしている。首の後ろで一纏めにした長めの髪は、茶髪を通り越してほとんど金髪に近い。耳にはピアス、指にはリング、胸元には鳥の羽を模ったペンダントトップが揺れていた。押し並べて派手な風貌の男だが、持っている黒塗りの扇子が、彼に一片の品のよさを添えていた。

「あーずっるーい！」

今度は一飛の傍らからひとときわ甲高い声があがった。丸みのあるセミショートが、少女の動きに合わせて元氣よく跳ねる。

「はいっはーい！ あたしは猿渡杏樹さわたりあんじゅって言いまーす。で、こっちが双子の弟、志登ゆきとっていうの。よろしくね！」

彼女は弾むように言って、隣の少年を指差した。

「何勝手に名乗ってんだよ、杏樹っ」

「あ、ごめ。自分で自己紹介したかったよねえ」

「ちがうっ」

きっぱりと断言すると少年は不機嫌そうに桃河を一睨みして、そっぽを向いてしまった。横で「じゃあ、なんで怒ってんのー？」と杏樹がきょとんと頭を傾ける。

姉の杏樹と弟の志登。双子というだけあって顔の作りや背格好はよく似ていた。着ているものも制服のブレザーの下にお揃いのスクールセーターとスニーカーで揃えられている。しかし人懐こく快活そうな姉と比べて、弟は人見知りをするタイプなのか著しく無愛想でトゲトゲしい感じだ。よく見れば、二人は手の甲から肘まで覆った奇妙なグローブを装着していた。防寒用とは違う。指先が露出していて、甲の部分に銀のプレートがついた手甲のような形だ。中学生が洒落で着けているにしても、違和感がありすぎる。

「さあて。一通り挨拶も済んだことだし、そろそろ始めるか。奴っこさん、もう待ってられないみたいだぞ」

そう一飛が示した相手は、いまにも躍りかかってきそうなほど殺気立っていた。狩りを邪魔されたことに怒っているのか、新たな獲物に歓喜しているのか。猛獣のごとき唸り声をあげ、炯々たる赤い眼がいつそう深みを増していた。

一飛が口端に不敵な笑みを浮かべる。そして扇を持つ手が頭上から一気に振り下ろされた。すると、ぱんっと小気味のいい音をたて青緑色の扇面が露になった。円を三等分したような形はどう見ても扇子にしか見えないが、大きさは桃河の知っている物と比べて二倍くらいはある。

するとそれを見た杏樹が待つてましたと言わんばかりに顔を輝かせた。一度だけ膝を屈伸させ、左手に右のこぶしを叩き合わせる。姉が前傾姿勢で身構えた横では、志登が静かに目標を見据え、わずかに重心を落とした。

「ちょ、おまえら何をする気だよっ！」

ただならぬ雰囲気は桃河はようやく言葉を発することができた。

「鬼退治だよ、桃河。それが僕らに託された使命なんだから！ 大丈夫。桃河のことは僕が守るよ」

振り向きもせず走太は答えた。桃河を庇うように立って、抜き身の刀を正眼に構えている。

「んじゃ、戦闘開始だ」

「おう！」

一飛の合図で、四人は一斉に駆け出した。

「お、おいっ」

伸ばした手は制止の意味を成さずに虚しく空を掴んだ。取り残された桃河は、呆然とその光景を見つめた。

【11】

涼やかな湧水の流れを思わせる流麗な動作。ひらめく扇は風に舞う桜の花弁のように。

襲い来る虚鬼たちを最低限の動きでいなし、一飛が一線を描いた。短い悲鳴が轟く。ほの碧い光の尾を引きながら扇子がひらりと翻って、虚鬼が地面に崩れ落ちた。

一飛と背中合わせに、双子の姉弟は息の合ったステップで虚鬼を翻弄する。軽快でアクロバティックな動きは、ときに宙返りまで披露して相手をからかっているようだ。

若い男の虚鬼が死角から金属の棒で殴りかかる。「杏樹っ」と鋭い声が飛んだ。杏樹が紙一重で攻撃をかわすと、男は地面を叩いてたたらを踏んだ。杏樹はその隙を見逃さなかった。たつと踏み込んで跳躍。身を屈めた男の両肩に手をつく、頭上を転回して背中側に降り立った。背後に気を取られた男の前に、志登がすかさず躍り出る。その瞬間を待っていたかのように、姉弟の手甲がぽうっと淡い光を灯した。剥き出しだった指先が瞬く間に金色の爪甲で覆われる。二人は寸分と違わないタイミングで――男を挟んで前と後ろから――袈裟懸けに金爪を振り下ろした。

倒れゆく男の向こうでは、走太が五人の虚鬼と切り結んでいた。突きつけられたナイフにも走太は怯む様子を見せない。摺り足で間合いを詰めると紫電のごとき一閃で相手を斬り捨てた。手首を返して脇を払う。一片の淀みもない銀の軌跡が、幾筋も刻まれる。一般的な男子高校生の平均身長を、20センチ近く下回る小柄な少年が携えるは、刃渡り60センチ程もある日本刀だ。一人を斬って、また一人。酷薄な鋭さを伴って切っ先が踊った。つぶらな瞳に氷刃を宿らせて、次の太刀が放たれる。

次々に斬り伏せられていく虚鬼は、鮮血の代わりに黒い靄を噴き上げた。

「なんだあれ……っ」

桃河は思わず身を乗り出して声をあげた。

「あれが彼らを虚鬼に貶めた元凶よ。人の負の感情から生まれ、人の心に悪意を植え付ける——現代の世に人知れず蔓延っている悪鬼の本性」

「本性って、あんな煙みたいのがか？」

「本物を見るのは初めてだけど、人に憑いている時の方がよっぽど鬼らしいわね」

「さて。……おまえ、ひょっとして『鬼』が見えてるのか？」

「ちゃんと見えているわ。桃弧の結界のおかげでね。たぶんあなたと同じくらいには見えていると思うけど？」

なんでもないことのように平然と少女は答えた。何をいまさらとでも言いたげに首を傾げる。

桃河は「この女……」と口に出さずに毒づいた。桃弧の結界には鬼を可視化する効果もあったらしい。少女にそれらしい反応がなかったせいで、気がつかなかったのだ。彼女はこれまで鬼を見たことがないと言っていた。にも拘らず、少女は初めて目にしたのはずの異形を前に顔色ひとつ変えなかったのか。男の桃河でさえ驚愕に震えたというのに。実に……かわいげがない。

「見てのとおり鬼は自分の肉体を持たないわ。あれは乱を求める鬼の本能だけが残った亡霊みたいなもの。奴らを浄化できるのは、あなたと桃弧以外この世に存在しないのよ」

「だったら、あいつらがやってることはなんなんだよ」

「人の身から一時的に鬼を切り離しているの。それが彼らの魂に秘められた力。あの刃器はそれが具現化したものよ。刃器は人に憑いた鬼だけを切り裂き、強制的に引き剥がすことができるの」

彼女の言が真実か否かは、すぐに形となって証明された。黒い靄を噴き出す虚鬼のツノが、水に落とした角砂糖のように崩れ始めた。凶器と化していた爪や牙が抜け落ち、顔に生気が満ちていく。虚鬼

は見る間に本来の人の姿を取り戻していった。やがて虚鬼の中に凝っていた闇が全て放出されると、彼らの体は透けるようにその場から消えてしまった。

「き、消えた？」

「結界の外に解放されたのよ。心配はいらないわ。鬼に乗っ取られていた記憶は残らないけれど、すぐに意識も回復して元の生活に戻っていくはずだから」

器を失った鬼は彷徨うように浮遊して、くると頭上を旋回していた。桃弧の結界に阻まれ外に出ることができないのだろう。

「ラストーっ！」

元氣な掛け声と共に、残っていた虚鬼が杏樹と志登に吹っ飛ばされた。もんどりをうって地面に投げ出された虚鬼から、また黒い靄状の影が立ちのぼる。器が結界の外へ出されると、あとに残った人間は桃河たちだけになった。

すると、それまで好き勝手に漂っていた黒い靄が、一処に集まりひとつの塊となった。伸縮を繰り返し不規則にうねりながら、塊は何かの形を取り始める。

桃河は頬が引き攣るのを感じながら、声も出せずにそれを見ていた。

蠢く黒い塊から現れたのは、身の丈3メートルはあるかと思われる巨大な影法師——のようなもの。人の輪郭をとったそれには、目も口も鼻もない。空間に人型の穴が開いたようだった。頭頂部にぼつんと、円錐形のツノだけが白く浮き立っている。

桃河が呆気にとられて見上げると、巨大な黒鬼もこちらを見下ろしてきた。目はないが、気配でそれとわかった。言いようのない悪寒が走り全身が総毛立つ。

「うわぁ。おっきいねえ」

致命的に空気の読めない走太が、気の抜ける感想を述べる。

「おまえなっ、もうちょっと緊張感とか持てないのかよ！」

「ええっ？　だって桃河はすごいと思わないの？」

「はいはい。すげーよびっくりだよ——次から次へと本っ当に！
ああもう俺がいったい何をしたってんだよ！」

パニックに陥る寸前、桃河の頭上に影が落ちた。抱えていた頭を上げてみると——硬いのか軟らかいのかも分からない黒い物体が、まさに振り落とされようとしていた。桃河は悲鳴を上げてその場から飛び退いた。地面を転がるように移動してなんとか体制を立て直す。

巨大な拳が重々しい音を立てて大地を叩いた。一呼吸おいて。黒鬼の右足が持ち上がる。今度は桃河たちを踏みつけにかかる気であるようだ。動きに素早さはないが威力は十二分にある。桃河は全速力で黒鬼から距離を取った。

「ど、どうすんだよ、あれ！」

息を切らせながら、叫ぶ。

「どうするもこうするも、逃げてるばかりじゃ何も解決しないわ。
このままじゃ、いずれみんなぺしゃんこよ」

こんなときでも彼女の声は落ち着いていた。少女は一飛の腕の中にいた。一飛は、人ひとりを抱えているとは思えないほどの快速で、桃河の隣を併走する。一飛に横抱きにされたまま少女は続けた。

「この国ではね、昔から悪い鬼は退治されるものと決まっているの。そしていま、その鬼を退治できるのは他の誰でもない、あなただけなのよ」

「またそれかよ！　俺にそんな力あるわけないだろ。弓の使い方だってロクに知らないってのにっ。第一、矢もないのにどうやってあいつを倒せるっていうんだよ！」

本来、弓と矢はワンセット。共に揃って初めて役に立つものだ。どちらが欠けていても武器としての真価を見ることはない。だが標的を射るために番えるべき矢がここにはなかった。

「桃弧に矢など必要ないわ。桃弧のことはあなたが一番よく知っているはずよ。落ち着いて、心を傾ければ聞こえてくるわ。答えはあ

なたの中にあるのよ」

「ああもおおっ！　なんで話を通じないんだチクショー！」

「あなたは覚えていなくても、あなたの魂は忘れていない。あなたにいま必要なのは覚悟よ。あとはただ思うままに動けばいいの」

ただでさえ展開に置いていかれているのに、また訳のわからないことを並べ立てられ桃河は叫び出しそうになった。

【12】

「桃河！」

走太が急ブレーキをかけて立ち止まった。つられて桃河の足もストップがかかる。走太は強い意志の灯った瞳で桃河を見上げ、

「僕たちが囷になるから、その隙を狙って」

「おまえ、何言って、」

「大丈夫。桃河ならできるよ」

「ちょ、ちよっと待ってって、走太！」

叫んだときには、走太はもう黒鬼に向かって走り出していた。

それに続いて、

「という訳だから、あとは頼むな、大将？ あんま力入れすぎんなよ！」

一飛が、桃河の脇を走り抜けた。間際に、何の意味があるのか軽くウインクなんぞを残して。

「なあんか、クライマックスって感じで盛り上がってきたねえ。よし。あたしたちも行くよ、志登！」

勢いよく駆け出す杏樹のあとを、志登が追いかける。すれ違いざま、

「……びびってんじゃねーぞ」

「って、おい！」

彼らはそうすることが当然であるかのように、敵に立ち向かっていく。またひとり置いていかれた桃河は、強く唇を噛み締めた。

胸の奥が熱い。

チリチリと桃河の胸を焦がす熱の正体は焦りだった。狂おしいほどの焦慮。それが何に対しての焦りなのか桃河にはわからない。胸につかえる苛立ちに桃河は答えを求めて叫んだ。

「あいつら、いったいなんなんだ？ どうしてあんな……っ」

その肩越しに見える黒鬼を瞳に捉え、少女が花唇を開く。

「あなたも知っているでしょう？ 英雄は、ひとりで鬼と戦ったわけじゃないわ。その傍には、いつだって固い絆で結ばれた『とも』がいた。だから、恐ろしく強大な敵にも立ち向かっていったの。――彼らもあなたと同じよ。特別な。彼らには彼らの魂に刻まれた誓いがある。そのために、いま彼らはここに在るの」

たったひとりの主のために。時を越えて、再び彼らは集ったのだと――彼女は言った。

――『着いて行きましょう。どこまでも――』

黒鬼の足元を旋風がすり抜けた。走太は鬼の背後に回りこみ、勢いのまま刀の刃器を走らせる。しかし手応えはまるでない。巨体が上半身を捻って走太に拳を突き出す。すかさず、無防備になった脇腹に、扇の刃器が一文字を切る。鬼はうっとおしげに出した腕を横に払うが、一飛はそれを優雅に飛び躲して着地した。反対側にできた死角を狙って杏樹と志登が爪の刃器を叩き込む。致命的なダメージはないものの、三方向から交互に繰り出される攻撃は、標的を攪乱し一時も的を絞らせなかった。仲間の呼吸を読んだ上で、わずかな隙について黒鬼を攻め立てる。そんな彼らの動きには、一朝一夕では築けない絆が見えた。

息の合った連携攻撃に魅せられて、桃河の胸はいっそう熱く高鳴った。

そんなはずはない――。

否定の言葉を自分の心が否定する。桃河の中に出会ったばかりの彼らを慕わしく思う気持ちがこんこんと溢れていた。

桃河は爪が食い込むほど強く握った拳をゆるゆると開放した。

「……なんだよ。なんで、どうして俺なんだよ……」

「仕方ないわよ」

少女が、ずっと桃河の隣に立った。端然と前を見据えたまま、き

っぱりと桃河に告げる。

「だって、これは運命だから」

「運命？」

「そう。あなたたちが特別な魂を持ってこの世に生を受けたこと。

私の家が代々桃弧の守り人であったこと。今日、あの場所で私たちが出会ったことも偶然なんかじゃない。全部、運命なんだから」

だから、と少女がこちらを見上げてきた。

——逃げることもなんてできないわよ？

口に出さずとも彼女の目が暗にそう告げていた。

だが、桃河は抗いたかった。ここで受け入れてしまったら、もう戻れない気がする。手にした桃弧を見下ろし、桃河は呻くように呟いた。

「俺は……」

「信じる信じないはあなたの自由。——でも本当はもう、あなたもわかってるんじゃない？」

「……っ」

「危ないっ！」

悲鳴じみた誰かの声に、俯いていた顔が勢いよく弾かれた。

限界まで見開かれた双眸に映ったのは。

やけに緩慢に見える動きで無造作に払われた大きな手と、横ざまに宙を舞う小柄な体躯だった。

衝撃に歪む口元、きつく閉じられた瞳。離れた場所にいる桃河の目にも、はっきりと捉えることができた。その表情は、かの少年^{かお}には最も不釣り合いなものだと思っていた。

——どくんっ。

大きく跳ねた自分の心臓の音を、桃河はどこか遠い場所で聞いたような気がした。

「くっそおおおっ！」

思うより早く、桃河は弓を構えていた。

桃孤は脈打つように淡く発光している。

体の奥で爆ぜる血を押さえつけるように深く息を吸う。矢も番えていない弦に指をかけると、それに合わせて青白く光る矢が現れた。桃河は誰に教えられなくとも、すでに桃弧の使い方を心得ていた。狙いを見据える眼光に、迷いなど見当たらない。

腕に一切の力を込めて弦を引くと弓が大きく湾曲した。番えられた矢がいつそう輝きを強くする。溜めていた息を吐き出すのと同時に、桃河は限界まで引き絞られた弓弦を解き放った。

意を映した光の矢は、標的に向かって真っ直ぐに空を駆け抜けた。そして――。

黒い巨体の頂に白く浮立つ一本のツノを射貫いた。

フルオオオオオオオ――。

心底を揺るがす音が鼓膜を震わす。それは未踏の洞穴に吹き荒ぶ物悲しい風音にも似ていた。悲鳴というよりは鳴き声に近いその声が、桃河には人の嘆きのように聞こえてひどく胸が痛んだ。

ツノを失った黒鬼は頭と言わず手足と言わず、ボロボロと音もなく崩れ始め――苦しみとも、悲しみとも、怒りともつかない断末魔の叫びを残して跡形もなく掻き消えた。

【13】

「終わった……の、か？」

そう呟くと疲労感からなのか安堵からなのか、体から力がすんと抜け落ちる。ずるずると体が沈み、桃河はその場に膝をついた。

「とおーがあー」

さらに脱力を誘う馴染み声が耳に届く。

のろのろと首を向けると、パタパタと走太がこちらに駆け寄ってくるのが見えた。その後ろについて歩いてくる三つの人影も。

「やったね、桃河。お疲れさまっ」

傍らに立った走太が両膝に手をつけて、こちらを覗き込んできた。制服のあちこちが砂埃にまみれて白くなっている。擦り剥いたのか走太の頬は少し赤くなっていた。どこに置いてきたのか日本刀を模した刃器はもう持っていない。

にこにこ機嫌のいい笑顔を向けられて、桃河の強張っていた頬も自然と緩みかけた。

「——って、ちょっと待て。走太、おまえ体は？ さっき盛大に吹っ飛ばされてなかったか？」

「うん。でも大丈夫。一飛さんが受け止めてくれたからあんまり痛くなかったよ？ 痣くらいできちゃったかもだけど。ほらっ」

あっけらかんとした調子で、走太はぴよんとその場で一回転して見せた。

「……ああ、そおかい」

重力に負けたかのように、桃河はがっくりと肩を落とした。なんとなく腑に落ちない。そんな気がしなくなかったが、桃河はそれ以上考えることを放棄した。走太の能天気な顔を見ると、何もかもが面倒になった。

なんにせよもう終わったのだ。これで家にも帰れる。帰って寝て、今日のことは悪い夢と思って忘れてしまおう。

桃河は地面に両手をついたまま長々と息を吐き出した。

すると、その様子を傍で見ていた志登が、

「なあ。たった一ぴき倒しただけでこのざまって、ホントに大丈夫なのか？　これから仇敵の気配を嗅ぎ取った鬼どもが、みんなコイツのところに集まってくるんだろ？」

へたり込んだ桃河を顎で指し不服そうに目を細めた。

「大丈夫、ダイジョーブ。大將が不慣れな分は俺たちがフォローしてやればいいんだし。なんにも問題ねえよ。そのために俺たちがいるんだからさ」

「わお。一飛さんて大人あゝ」

「そりゃあ、一応この中では年長者だしな。敬っていいぞ？」

胸を反らせる一飛に、杏樹が手を叩いて賞賛した。無邪気な姉の姿を志登は苦虫を噛み砕いたような顔で見やった。

頭の上で交わされる会話に引っかけかりを覚えて、桃河は顔を上げた。なんとなく嫌な予感がして、顔が引き攣る。

「これからってなんだよ。終わったんじゃないのか？　だって、もう鬼は倒しただろ……？」

彼らは一瞬きよとんと桃河を見やって、互いの顔を見合わせた。そしてまた桃河を見て意味深な表情をつくる。

「終わってなんかいいわよ」

その場の全員の視線を受けとめて少女が嫣然と桃河に微笑みかけた。

「鬼は人が抱える闇の数だけ存在しているわ。そして器を自由に操れるほどに力をつけた鬼は、かつて自分を滅ぼした宿敵を仇なすために、おのずとこの地へ惹かれてやってくる」

彼女の黒い瞳は有無を言わせなかった。

「戦いはこれから始まるのよ」

――。

思考を根こそぎ吹き飛ばされて、桃河の頭の中に空白が生じる。パクパクと口を動かしてみるが、喉からはなんの音も出てこない。

「心配しないで、桃河。桃河のことは絶対僕が守るから」

と、走太は元氣よく両手でガッツポーズをつくった。

「こらこら。独り占めするつもりかよ。俺たちが、だろ？ まあ、そういうわけだから、んな顔すんなよ大将。サポート役はばっちりやってやるからさ」

一飛は真顔で冗談みたいなことを言ったあと、桃河を見てまたにやりと笑ってみせた。

「ねね、そんでさ、そろそろあたしたちにもちゃんと名前教えてよお」

撫すくれたままの志登をおいて、杏樹が好奇の眼差しでぴよこんと前に乗り出す。それに乗じて、「そういえば」と少女がぽんと手を打ち合わせた。

「私もまだちゃんと挨拶をしていなかったわね。私は、美頼きより。姫崎ひめさ美頼きよりよ。桃弧の守り人として、あなたの戦いを最後まで見届けさせてもらうわ。長い付き合いになると思うけど、これからよろしくね」

そう言って、彼女——姫崎美頼は、桃河に手を差し伸べた。

目を見開き、桃河は完全に硬化した。

「……マジかよ」

ただ一言。口から零れた眩きが、ひゅるりと吹いた風にさらわれ空へと消えていく。気がつけば頭上を覆っていたはずの暗雲もどこかへ遠ざかっていた。薄い千切れ雲の向こう側には綺麗な茜色の空が広がっている。夕日に映える池の上で、水鳥がくあつと鳴いた。

柴原桃河一七才。

彼の戦いは、まだ、始まったばかり——。

【13】（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました！

文章書き修行中なので、日本語のおかしいところや誤字脱字などありましたらこそつと教えていただけると嬉しいですよ（^^）

えっと、いかにも「To Be Continued・・・」という感じで終わっていますが、このお話の続きは最初から考えておりません。もともと漫画の読み切りをイメージしたネタなので。後半の詰め込み感が否めないのですが、あくまで読み切りサイズにこだわりました。

そんなわけで続きはないですが、主人公（桃河）以外を主軸にした短いサイドストーリーはあったりします。ただ蛇足っぽい気がしなくもないので、公開するかしないかちょっと悩んでいます。ご要望があったら……とも思うのですが、でも読んでみたいという方って、いてくださったりするでしょうかね；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3047q/>

お伽噺と言わないで。

2011年5月19日01時55分発行